



TITLE:

青鯤鯨

AUTHOR(S):

内田, 勲

CITATION:

内田, 勲. 青鯤鯨. 地球 1937, 27(1): 27-33

ISSUE DATE:

1937-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184643>

RIGHT:

地形の測定を行はないのは矛盾も甚しい。さうして同君の力説する寫眞のやうなもの、巧拙は論文の科學的價值には全く無關係であり、上手な寫眞とか地圖とかは單なる奇麗仕事であつてそれ以上の何者でもあり得ない。(1936 ×)

文 献

(1) Imamura, G. and Hirabayashi, T.:

青^{セイ}

鯤^{コン}

鯨^{シン}

Geomorphology of the Japanese High Mountains.

(Fourth Report.)

Nivation Phenomena around the Peak of Sironma.

Proc. Imp. Acad. II 11935 331—333.

(2) 辻村太郎 本邦のカルは氷河之を形作りしや否や
地質學雜誌 二〇 大正二年

臺南市の北約二〇軒に北門郡役所の所在地佳里街があり、その西北西約一〇軒、同郡内に青鯤鯨と云ふ部落があつて、著しく變つた特色を持つてゐるところである。

この聚落は小島上にあつてもとはこの島は海岸線から五〇〇米ほど離れたところに位してゐ

内 田 勸

たのであるが、近來この附近の洲を堤防で圍み、鹽田とする工事が進められ、その爲に昭和十年からこの島は陸續きとなつてしまつた。従つて今後は此の聚落の特色も急激に失はれて行くことであらうが、從來は臺灣特有の竹筏^{ツッパイ}によつてのみ渡られる不便な土地であつた。その爲この

島民の使ふ言語も本島のものとは稍異つたもので、臺灣語の方語が行はれてゐると云はれてゐる。

島の大きさは現在凡そ東西二〇〇米、南北二

第一圖 島の四隅の石碑



第二圖

明治七年

青鯤鯨



ひとめられて、その内側は潟の趣をなし、青鯤鯨には僅かに小波があたるだけとなつてゐる。

五〇米にすぎず、島の高さは海面上——二米と云ふ海上に板を浮べたやうに低いものであるが、島の西方(外洋に面した方)二〇〇〇米ほどの所に長く青山港油・網子寮油などの長い洲が堤防の如く横つてゐる爲に外洋激浪はここで喰

側でも季節風の荒れる冬季にはやゝ高い波が生ずる爲、この波をうける島の北側は徐々に浸蝕されて行く。従つてかつての浪打際であつた所に護岸の爲に築かれた石垣が現在の岸から一〇米程の沖(北)に残骸をさらしてゐる一方、風の陰に當る南方には泥がたまり、且つこの島の重要産業である牡蠣の採集の結果、その殻を南の海中に捨てゐる爲愈々南に土地が増大する。(この貝殻層の厚さは鹽田の堤防築造の爲に土地を掘つた所をみると一米を越してゐる。)

従つて土地の高さが僅か一、二米でありながら浸水することもなく危く存続してゐるのであるが、この洲の内

尙この島の四隅には「東嶽大帝鎮守平安」など書いた高さ五〇糎ほどの花崗岩の石碑が立つてゐるが、島の移動・堤防の築造の度にこれを移動させる爲、現存する石碑の位置は過去の島の四隅を示すものとは云はれない（第一圖參照）。

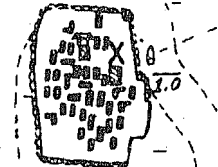
この石碑の文字は四隅全部同一ではない。

又この石碑のいはれを明かにしないがこの島の鎮護を祈願したものである事は明かである。この石碑を移動せしめる時には祈禱師を招いて祭式を行つた後に行ひ、輕々には動かさぬと云ふが、常には別に敬意を表せられてゐるやうには見えなかつた。

島の移動を具體

第三圖
大正十五年

青鯤鯓
イセ
コ
シ
ン
シ
ン



的に明示するものは新舊二葉の地圖である。舊版の方は明治三十七年臨時臺灣土地調查局

で作成した二萬分一地圖であり、新版の方は大正十五年、測量部發行の二萬五千分一地圖である。前者は舊地名を領臺後に改めた經過が示されてゐて、舊地名印刷の後、亦で新地名を改めて二重刷にしたもので現在では殘部が少く、珍品視されてゐるものである。海拔高度は尺を以て示してある。

これら兩者の測量の間隔は二二年であるが、その間に青鯤鯓及び外洋にある網子寮油は共に南方に移動してゐる事が認められ、殊に北の將軍庄と南の七股庄とが、網子寮油と青山港油の間を境界としてゐる爲、洲の移動につれて境界線も變動してゐる。

青鯤鯓のみに就いて見るに、以前から位置の變らなかつた廟を比較すると、以前は島の中央にあつてゐたものが今では北にかたより、又島の外形上、北方の突出部がけづられ、南に突出してゐるところが全部陸となつてゐる。

僅か二二年間に於ける島の移動がこのやうに

速かである爲、現在では島の大部を石垣で圍んでゐるが、而もそれらの中、北方のものは幾度かの改修に拘らず徐々にくづされて行つてゐる。

尙この附近の海が漸次淺くなつて來てゐることとは二枚の地圖を比較して直ちに知られることである。

かくてこの島は全く泥——砂でなく——と貝殻とから成つてゐる。従つて此の島では石は砂利に至るまで對岸から運び、自然石は全く見當らず、此の度の鹽田用堤防の岩石や、護岸用の石など、總てジャンクによつて澎湖島から運んで來てゐる。

このやうに此の島は海中に孤立する低平の島である爲、風が極めて強く、又地中に鹽分を含む爲に草木は殆ど生長せず、僅かに家及び垣の南側に小さな草木が數本あるのみで、それらの木も人の身長程の高さに止り、且つ一本の木の中でも風の強く當る北側の枝は殆ど生長しな

い。

且つ又右のやうな地質・地形の爲飲料水には著しい不便を感じてゐる。従つて天水を利用してその貯水槽をつくり、或は土地に穴を掘つて泌み出す水を用ひる。この一種の井戸は從來直徑數米もある摺鉢狀の穴であつた由であるが、近來は縦・横各二米位に板で圍んで形を正し、危険防止と貴重な水の盜難防止との爲周圍には竹垣をつくつてゐる。この井戸——むしろ泥穴と云ふべきもの——の深さは凡そ二米位であつて、底に僅かにしみ出す水を底に下つてくみとるのであつてつるべはなく、又乾燥季には常に水をたゝえてゐる譯ではなく、従つて水の入用の度に泥を掘り下げて水をとる。従つて井戸は追々深くなつて行く。住民の持つこれら水槽と井戸の數は貧富のバロメーターと云はれてゐる(圖版第一版第一圖及第二圖)。

然しこの水は全くの泥水で、貯水槽の底には泥が堆積してゐる程であり、且つ鹽分を含んで

ゐるが、濾す事もなく飲用に供してゐる。又このやうに貴重な水である爲、洗面などには一杯の洗面器の水を以て父・母・子と順に用ひて行く爲最後にはドロ／＼の黒い水になる。その爲部落のトラホーム罹病率は九〇％を越してゐる有様である。

然しこの島に於ける唯一の内地人である警官のみは別で、駐在所には特に水夫と名付ける水汲人夫がゐて、竹筏を以て西方二〇〇〇米をへだててゐる青山港泊の水をくみとりに行く。然しこの井戸も海拔凡そ二米程の砂洲に深さ一米位の穴を掘つて水を得てゐる爲、激浪の來る時にはこの洲を越し、水は海水を含んで全く使用に耐へなくなり、この時は本陸（臺灣本島）へ竹筏でのりつけ、更にトラツクによつて水を運ぶとのことである。

このやうに水に不便なところであるが、トラホームを除いて一般に著しく健康な土地と云はれ、駐在所巡查長澤氏の話によると島の死者は

幼児か老衰者かで、中年の者は殆ど死なず、僅かに出稼先で病を得た者位であり、かへつて佳里の製糖工場に働きに出かけた者が次々と病氣となつて歸つて來る爲、近來は出稼を好まぬとの事である。又マラリアも環境の關係上發生せず巡查も健康を害した者がこの島の勤務となればこれを回復するとの話であつた。

この島の住民の大部分は勿論漁業に従事、その爲の漁船（戎船^{ゴエンボウ}）は合計十二、三隻あり、又内地の傳馬船、舢舨に當る竹筏は島の西岸及び北岸の海中に柱四本を立て、これに横木をつけた臺上に列をなしてならべてある。海面から僅かに一米足らずの高さに止るが、激浪がないので流されもせず、一望整然として一種の壯觀である（圖版第一版第三圖）。

漁業者の外三軒の商店があつて酒・煙草・罐詰その他の日用品を販賣してゐる外、臺灣民家の通例として各戸に豚を飼つてゐるが、一定の飼養場はなく、空地をうろつき廻り、まことに不

潔であるが、その糞は養魚場（魚塢）の飼料として必要不可欠のものである爲に、糞と泥とをま

第四圖

豚の糞の園子と糞と泥とをまてめる園子と上りて乾に上る



るめて園子とし、これを賣るのが少年達の大切な内職となつてゐる（第四圖）。

此の島の住民は一七六四人（昭和十年末日調査、本島在籍者）又は

一六八〇人（昭和十年國勢調査）で、男女の數は男九一〇、女八五四である。（在籍者による）この二つの調査の數で明かなるが如く、出寄留者が多く、人口は過剩の状態を示して、人口密度を一方軒當りに計算すれば三五八〇人と云ふ驚くべき數に達し、従つて内地山村によく見る如くに家族はなるべく分家せず、人口一七六四に對して戸數二三二、即ち一戸當り七・六人（國勢調査による現在人口をとつても一戸當り七・二人）と云ふ大きな家族となり、土地は隅々まで利用されて空地としては僅かに網や帆の手作りする廟前の廣場丈で、他は特定の道路さへなく、家の軒下を通路とし、勿論庭もなく、従つて堀もない。このやうな有様が又草木の生える餘地をなくしてゐる譯であり、墓地も東北遙か五軒を距てた山子脚に設けられてゐる譯である。

先に簡單に記したやうに出寄留者が多いが、これは漁業を生業とする關係上女の出嫁が多

く、主に苦力として甘蔗畑や土木工事に傭はれ、正月は家に歸つて迎へるとの事である。

然しこの産業、出稼による収入も多いものでなく、野菜は一切産せず、豚と豚の糞以外には内職や副業と云ふものもなく、全體としては貧民窟と云ふべく、財産は竹筏と網と家——それも泥をこねてこしらへた土塊造りにすぎぬものが多い——と丈けと云つてよく、二階建や電燈はなく、普通のランプを使ふ家は二軒だけで、他は細蕊の豆ランプをともしてゐる有様であり、教育程度も著しく低くて公學校卒業二名、嘉義農林卒業一名（漁村から農林學校に通學させた譯は分らぬが、本島人の入り易い實業學校だからであらう）の外は無學で、全島殆ど國語を解しない。

青鯤鯓とは以上見たやうな所であるが、この聚落の成立については十分知る事が出来なかつた。地名の「鯤鯓」とは一種の魚のことで、臺灣ではこの名をつけた所が各地にあり、安平を古

く一鯤鯓と呼んでゐた如くで、砂洲などが水面上に低平に現れてゐる様が魚背の水上に現れた形に似てゐる所から名づけられたものであらうこの島民の種族は福建族であるが、その言語の本陸部のそれと異なることや、云ひ傳へ等から所謂海賊の本據説が或は妥當かも知れない。島民の顔を一見しても漁民なるが故の逞しさ、色の黒さの外、どこことなく妻味があり、實に嫁をもらうにも本陸からは容易に來ず、殆ど島内で婚を通じてゐると云ふ事は、交通の不便と云ふ事の外に特殊部落視してゐる爲とも考へられる。

又墓所をこしらへてゐる山子脚とも何等かの關係を考へられるが、十分にはわからず、且つ殆ど文盲のみ住む所であるが故に古い文書の出て來る事を豫想されず、部落の成立を疑問のまゝとしてこの稿を終る。

尙青鯤鯓の調査に關し、種々の便宜を與へられた北門郡守白仁寶一氏及び青鯤鯓駐在所巡查長澤勇二氏に對し厚く感謝したい。（完）